

言語

2009

4

Vol.38・No.4

2009年4月1日発行(毎月1日発行)第38巻第4号通巻453号 昭和47年8月12日第3種郵便物認可

特集 対話の方言学

コミュニケーションの地域性

再検討・日本語行動の地域性 西尾純二

発想と表現の地域差 沖 裕子

注意喚起時における言語行動の地域差と場面差 岸江信介
——テキストマイニングによる分析を中心に方言談話における会話方法の地域性 久木田 恵
——談話展開方法の分析対話における無助詞化の地域差 阿部貴人
——東京・大阪・津軽方言の対照から談話の音声的変種の地域性 齋藤孝滋
——関東地域における発話速度の地域性

新連載

インド学へのいざない 後藤敏文

◆特別記事

コピュラ文、存在文、所有文 西山佑司
——名詞句解釈の観点から

◆巻頭エッセイ

中村 弦／水野真木子

新連載●インド学へのいざない「一」

インド学とは

後藤敏文

(ことごとしふみ)

1 文献学に基づいた古代インド文化研究

講座や科目の名に「インド哲学(史)」、「仏教学」はあつても、「インド学」は聞き慣れないかもしれない。東北大学に八七年前「印度学」講座が設けられたのは例外である。「日本印度学仏教学会」は五八年の歴史をもつ。「インド学」はドイツ語 Indologie、英語 Indology に当たる概念で、インド古代中世の文献研究を中心とする分野である。現代インドの諸研究は歴史学、考古学、社会学、文化人類学などに委ねられてきた。

研究の方法は「文献学」である。この語は、ドイツ語 Philologie (「ことばの愛好」、英語 philology) の訳語と

して、上田敏が儒教の「文献」から採って用いたのが初めてされる。文字資料と伝承に基づき、あらゆる情報を探る学問である。写本、テキスト批判、伝承、文法・言語、歴史、事物、技術、生産、生活、制度、宗教、思想など、重点の置き方、光の当て方は多様であるが、基本は共通し、原典自身の正確な理解を追求する。そのために他分野の成果をも取り入れ、可能な限りの方法を動員して検証する。言語研究はその基礎部分を担う。

インド学は、従って、出自においては近年批判されがちな「植民地的学問」といえる。しかし、二〇〇年来客観的普遍的成果を積み重ね、人々の理解の地平を確実に広げ、



深めてきた研究の価値はいささかも揺ぐものではない。例えば、「業」、「輪廻」といった仏教の基本概念は突然変異によつて生じたのではない。婆羅門教祭司学者たちによる論争史の必然的帰結に基づく。そのことは最近になつて漸く明らかになりつつある。つまり、インドに遺された文献を総合的に検証し、歴史的に構想することなしには仏教思想の基礎概念も明らかにはならない。ギリシャ・ローマ、中国などの古典学諸領域の中でも、インド文献学は特別な位置を占める。三千年以上に亘つて切れ目なく多量の原典が著され、その多くが今に遺されており、各原典に当たりながら理論を構築し、また、その理論を原典に照らして検証することが可能なのである。

2 インド学とインド・ヨーロッパ比較言語学

インドの文献は、その前史がたどれるという有利な条件を持つてゐる。一般に「サンスクリット」の名で知られる「古インドアーリヤ語」は、イラン諸語と共通段階をもち、さらに、ギリシヤ語、ラテン語、ケルト諸語、ゲルマン諸語、スラヴ諸語、アルメニア語、バルト諸語、今はなきヒッタイト語やトカラ語など、「インド・ヨーロッパ語族」

の諸言語と共通の起源から発している。これらを歴史的に研究する学問を「インド・ヨーロッパ（印欧）語比較言語学」とよび、音韻対応・音韻変化を軸に、基になつた言語（印欧祖語）をかなり細部まで復元できる段階に達している。言語を基に、生活形態や文化の解明も試みることができる。印欧語比較言語学の成果はインドアーリヤ語文化の解明に資し、インド学は印欧語比較言語学に必要な資料を提供して中核的役割を担っている。

3 アーリヤ諸部族東進の背景

「アーリヤ」の諸部族は、イランに入った「アリヤ」を自称する人々と共通の時代を経た後、紀元前二千年紀中頃以降インドの地に入ったものと思われる。牛の群れを追いながらアフガニスタンの渓谷を遡り、カーブルの峠を越えて部族単位で三々五々インダス（スインドウ、そのイラン語形がヒンドウ）上流域に出たものであろう。彼らをより上流へ東へと駆り立てた何らかの歴史的事情が西方にあつたはずであるが不明である。

イランは正確には「イーラーン」で、「アリヤ（人）たちの（邦）」に由来する。ゾロアスター（ザラスシュトラ、

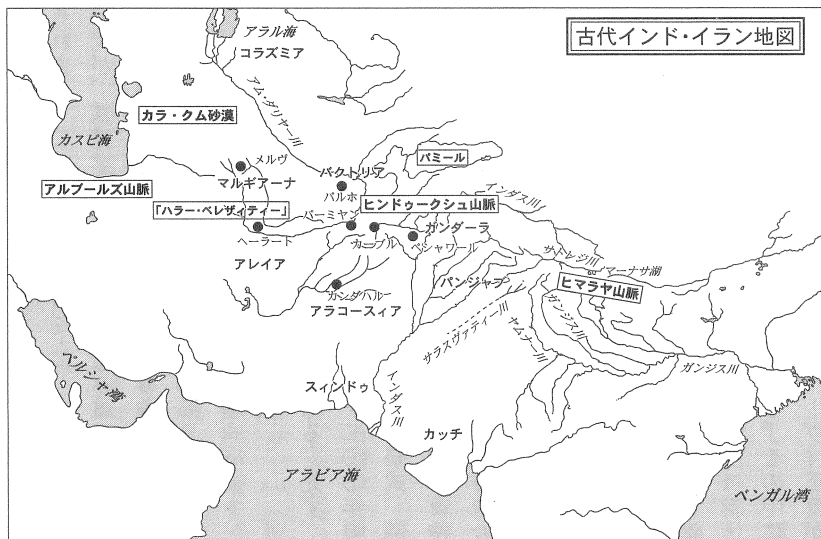
前十世紀頃かそれ以前)が開いた宗教の聖典『アヴェスタ』の言語はイラン語東南方言に属し、ダリウス(ダーラヤワウシユ、前三一四六)等のアケメネス(ハカーマニシユ)朝諸王の碑文は西南方言の一部族ペルシヤ(パールサ)の言語である。ともにインドの古い言語に極めて近い。

最古の文献『リグヴェーダ』(前二二〇〇年頃編集固定か)の理念上の中心舞台は、急峻な山岳を前に草原が広がるインド進出以前の高原地帯である。ゾロアスターの最初の活動域は、アレリア(ヘーラート〔古名ハライワ〕周辺)、マルギアーナ(メルヴ)、バクトリア(バルホ)を結ぶ三角地帯に求められ、次いで南のアラコソシア(カンダハル)に拠点を移した。『リグヴェーダ』讃歌の原形を携えていた人々がインド進入以前に活動していたのもほぼ同地域と思われる。ハライワはインドのサラユに対応する河川名である。カンダハル付近はかつてハラウワティシユとよばれ、インドのサラスヴァティーと同起源である。アフガニスタンの両地域を流れる河川の源流は、東進してガンダーラ(ペシヤワール付近)を経、インダスに注ぐカーブル川源流に近接する。パーミヤンの東側にある渓谷群の

中、いずれかの河川を遡って進めば、三〇〇〇メートルに満たない峠を越えるだけでインダス上流域に出る。アーリア諸部族はこれらの地域から出発したものであろう。

この水源域の北側にはヒンドウークシユから西方に連なる山脈が延び、アヴェスタではハラール・ベレザイテイー〔高い見晴台〕、アルブルズの古名)とよばれた。ヘーラートから北に流れる現在のハリ・ルードはこの山脈を越えて、かつてのマルギアーナの地で「黒い砂漠」(カラ・クム)に消える。その北には、ヒマラヤ山中から発し、ヒンドウークシユの北側、バクトリア北辺を経てきたオクス(アム・ダリヤー)が西北へ流れ、コラズミア(ホウワラズミシユ)でアラル海に注ぐ。これらの地域には、前三〇〇〇年紀からバクトリア・マルギアーナ考古複合(BMAC)が栄え、近年考古学上の発見が相次ぐ。前二〇〇〇年頃にはインドイラン共通時代の人々がこの先進文化と遭遇し、大きな影響を受けたことが『リグヴェーダ』、『アヴェスタ』などから推定される。文献研究と考古学との照合が俟たれる研究の最前線である。

BMACの繁栄とほぼ同じ頃、パキスタン海岸部のスィンドウ地方、パキスタンとインドとに跨るインダス流域、



インドのカッチ地方を中心にインダス文明の都市が栄えていた。同文明は次第に重点を移し、ヤムナー・ガンジス上流域にも広がるが、前一九〇〇年頃には下降期に入り、アーリヤ諸部族がインダス河域とその東に進出する前二〇〇〇年紀中頃には、地方文化に移行していたかと思われる。

4 インド学とインド研究の将来

「インド学」が今後も古い文献を中心とするデイスイプリンであり続けるべきか、現代の地域研究や考古学、歴史学、美術史などをも包摂したインド研究に発展すべきかについては多様な見方が可能である。長い歴史を経て今日の姿に至ったヒンディー、ウルドゥー等「現代インドアーリヤ諸語」の研究は必ずしも古典的インド学に属していなかった。南インドは現在タミル語などのドラヴィダ語圏であるが、紀元前後から顕在化するドラヴィダ系文化とアーリヤ系文化との影響・融合関係の解明は今後の課題である。インド文化圏には、さらにムンダー語、チベット・ビルマ系の言語などが用いられている。これらの研究も未だ「インド学」の中に有機的に位置づけられていない。

人文諸学は、今日、普遍的人類史の理解へと段階を進め

ており、個別文化の研究は人類史という座標軸の中に位置づけられよう。このような視点の下に、古代中世インドの文献研究が、基礎学問として成果を積み重ねてゆくべき使命を負っていることは、今後とも変わらない。より本質的な問題の構築に一層重点を移す必要はあろう。

5 インド学の対象——インドの主要文献

インド最古の文献群は「ヴェーダ」である。先ず、古い伝統を背後にもつ『リグヴェーダ』が前一二〇〇年頃インダス上流域で編集固定された。これに続き、祭式、儀礼、呪法に用いることば（マントラ）の集成、マントラや祭式の根拠についての議論（ブラーフマナ）が編集された。これを基に、より普遍的哲学としての「ウパニシャッド」が登場し、その中で後の思想界のいわば公理が打ち立てられる。さらに、祭式の綱要書が作られ、西北インドでパーニニが文法規則をまとめ上げたのが前四世紀初めである。

この頃までにアーリヤ諸部族はガンジス中流域に進出を終え、当時の最前線マガダ地方を中心に、バラモン・非バラモンの学匠・思想家や苦行者が輩出する。その中にゴータマ・ブッダやジャイナ教の改革者マハーヴィーラがあつ

た。マガダ国はインドを統一し、前三世紀中頃にはアショーカ王が現れる。王の詔勅を中期インドアーリヤ語（パークリット）諸方言で記した碑文は各地に遺され、今日まで実物が伝わるインド最古の文字資料である。

現存仏典の各部分がどこまで古く遡るかは明らかにできない。ブッダの生涯の事蹟が基となり、死後まもなく編集や伝承が始まったことは確かである。スリランカの僧院で整備され、ビルマ等南方各地に生きるパーリ仏典が全体としては古い姿を留める。パーリは「聖典」ほどの意味で、その言語は中期インドアーリヤ語の古形の一つである。ガングーラを中心とする西北インド方言や「仏教梵語」(Buddhist Hybrid Sanskrit)で伝承された仏典も部分的に伝わる。仏教梵語は中期の言語から古インドアーリヤ語、いわゆるサンスクリットに近い形に「還元」されているが、一種の共通語を目指したものであろう。漢訳、チベット語訳等の基になった「梵語仏典」の一部は十九世紀以来ネパール、中央アジア等から出土した。近年はアフガニスタン、パキスタンから流出した写本が注目されている。ジャイナ教は仏教と同じ時代背景から出発している。つまり、古ウパニシャッドにおいて確立した「業と輪廻」を

現生において克服する方法を打ち立てた。その聖典も仏典と同じ長い歴史を持つてはるはずである。しかし、現存する経典は紀元後に再編集されたものである。古い部分は半マガダ語という中期インドアーリヤ語で伝えられている。

『マハーバーラタ』、『ラーマヤナ』の二大長編叙事詩は紀元前数世紀間に胚胎し、紀元後に通俗的な「叙事詩サンスクリット」によってまとめられた。前者は吟遊詩人の諸伝承に基づくヒンドゥー（インド）世界の国民文学である。後者は詩人パールミーキの手になるものに代表され、芸能や美術の源泉として、東南アジアにまで広く受容された。

紀元前一世紀頃から、仏教では一般人をも対象とする大乘仏教経典が成立し始め、ブツダの神格化も進んだ。「ヒンドゥー教」の中にも『バガヴァッドギター』（聖なる神の歌）に見られるような唯一神崇拜の傾向が増す。後には、各地の王統や神々、女神たちの神話儀礼、宇宙の構成歴史などの記述を含む『プラーナ（昔のこと）』と総称されるヒンドゥー文献が紀元後十数世紀に至るまで順次作られた。

伝統的学者階級（婆羅門、バラモン）の間では、紀元前

後から長期間にわたり、法律や生活規定を集めた法典類、カーリグーサに代表される戯曲、詩など文学のほか、各種学術文献が、主に古典期のサンスクリット語で著された。マガダ地方からインドを統一したグプタ朝（三三〇～六世紀

半ば）による古典復興が果たした役割が特に大きい。医学書、測量学、数学、天文学・占星術、韻律学、修辞学、国家経営法、武術や馬術の著作とその伝統がある。有名な『カーマーストラ』（恋愛経典）もこれに属する。パーニニ文典には前二世紀にパタンジャリの『大注解書』が著され、古典復興後ほぼ今日に至るまで各種注解が作り続けられて古典サンスクリット語の標準とされた。「六派哲学」と総称される哲学学派の著作は多数に上り、仏教・ジャイナ教と、また各学派間の論争によって展開した。我が国のインド哲学史研究は、伝統的にこれらを主題としてきた。

次回から、リグヴェエダ、プラーフマナからウパニシャッドへ、仏教の成立、古典サンスクリット文献とパーニニ文典、インド学の可能性、入門へ向けて、などを主題として、具体的にインド学の中身を紹介していきたい。

（東北大学大学院文学研究科／インド文献学・言語学）